

事前キャンプなど説明責任 果たせ

7月3日～9月5日まで開催される東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会。いつぼう、聖火リレーは公道中止、「感動と興奮の共有」を目的としたパブリックビューイング（PV）も県や都主催は全面中止に。各自自治体の首長の判断がいま問われています。

最高責任者は、市長

6月17日から始まった流山 長へ答弁を任せました。市議会令和3年度第2回定例会（6月議会）。しかし、議会初日の市長報告でも、一般質問の答弁でも、井崎市長の自ら進んで口を閉ざす姿勢が際立ちました。

市内での事前キャンプまで1ヶ月を切ったなか迎える議会一般質問。オリパラに触れた質問通告は日本共産党だけ。市議団を代表し、小田桐たかし市議が質問を行いました。

小田桐市議は、「議会や市民へ何故、報告をや説明しないのか？オランダチームの事前キャンプ、ホストタウンの最高責任者は市長なのか？」と市長に質し、市長も「自分が責任者」としつつ、担当部

長へ答弁を任せました。オランダチーム（選手・スタッフ）は、オリンピックム団が3競技37名、パラリンピックチームが1競技5名が市内で事前キャンプを実施。市職員に加え、宿泊や練習場のスタッフ、警備員、ボランティアら最大106名が対応します。そのうち、27名は選手と複数日、1泊以内で、15分以上対応することから、毎日PCR検査を実施。一方、その他スタッフは、4日間に1回、または従事する日に検査が限定され、宿泊も隔離されるわけがありません。『バブル方式※』は、穴だらけ：が実態ではないでしょうか。

バブル方式とは、開催地を大きな泡で包むように囲い、選手やコーチらを隔離し、外部の人達と接触を遮断する方法。希望する選手へのワクチン接種、入国前後及び大会期間中の定期的検査、移動制限・行動制限など「ホテルと練習会場・会場以外には原則移動できない」ようにし、安全安心を担保するというもの。

「県が中止」と市主催PVは中止。一方… 歓迎式典、練習公開、児童生徒の観戦…市長判断できず

市主催PV（パブリックビューイング）は、「県が中止」と中止を決定するも、歓迎式典、練習公開は実施へ。「無観客」「人流抑制」「直行直帰」など専門家の指摘は無視です。都内ですら中止判断を首長が示す『児童生徒の競技観戦』（市内からは3校176

名が予定）について、学校教育部長は「本市及び競技場地域が緊急事態宣言などの場合は中止」と回答するいつぼう、井崎市長は「保護者が同意」と自らの責任だけは回避です。何もなければ自分の成果、何か起これば自己責任…呆れるばかりです。



流山市議会議員

小田桐たかし

保健・医療体制は質・量の拡充を

「人口20万都市」、「人口増加率全国トップ（13.99%・21年4月時点）」…その一方で課題も

人口急増の裏で、医療「過疎」実態が次々と

新型コロナウイルス感染症が市内で確認され、ワクチン接種がスタートしたものの、いつも施策が後手後手に回る流山市。ワクチン接種の遅れに、市民の怒りや不満が爆発しました。

いっぽう市長は、市民の不満や怒りへ、お詫びの言葉は一言もありません。また、小田桐議員に促されても、お詫びも反省もしませんでした。

また、64才以下の接種がスタートしたものの、その大半が会場設営から医療従事者の確保まで全てを丸投げする常設集団接種に依存しています。これは、地元行政と医療関係者による協働で希望する住民への安全で迅速な接種を進める多くの自治体とは異なる取り組みです。

小田桐たかし市議は、「自治

体によって、面積や人口、高齢化率も異なるが、委託事業者丸投げで集団接種を終えた場合、医療資源の強化につながるかは疑問」と指摘します。

保育所・学校だけじゃない…

人口急増のもとで、不足しているのは、保育園、学校だけではなくありません。

市議会では、小田桐市議の質問に、「県内37市中、医療施設数で31位、病床数で35位、医師数で28位、看護師数で25位」と担当部長が答弁。市職員からも「こんなに低かったとは…」との声が聞かれています。さすがに市長も「質・量の拡大は必要」と認めました。

保健センターの勤務申告 残業は去年の2.5倍

今議会、自民系議員の深いため息も…。一般質問で、「人口増加によるメリット・デメリットは？」との問いに、市長は増収増、コミュニケーションの向上などメリットをあげる一方、「デメリットはない」と言い切ったからです。

人口急増に伴い、市職員数は、市民千人当たりの市職員数は県下最低、5.5人。近隣の平均と比較しても、200人も少ないのです。その結果、通常の健診や母

子保健業務に加え、感染症対策やワクチン接種を担う保健センターでは、18年度307時間、19年度1460時間、20年度3677時と、職員数を増やしても残業時間が急増しています。

医療体制の不足、計画的な適正配置もままならない市職員数：課題に目を向け、心を寄せない限り、デメリットはもとより、課題すら見えなくなるでしょう。